

『暗夜行路』にみられる程度副詞の語彙と

その意味組織と各語の用法 (4)

——そのさまの程度を示すもの——

井 上 博 嗣

はじめに

本稿は前稿<sup>(1)</sup>に続くもので、対象とするヒト・モノ・コトの現実のありさまの程度を相当度・低度と量る一連の諸語の意味・用法を考察するものである。資料とした作品は前稿のそれと同一のものである。

(5)相当度であることを示すもの

相当度の程度とは普通の程度より上で高度の程度には及ばない程度を云う<sup>(2)</sup>。程度副詞に相当度を認めているのは『日本文法通論』森重敏著である。

(1)

## 一 「相当」について

「相当」と表記されて四例みられる。

### ① 形容詞相当の状態的意味を有する語句を修飾する場合

- 「書いたものでは相当悪者らしいが、要するに安っぽい偽悪者だ。――」  
(二二頁下段七)
- 閔徳元といふ若い両班で、その地方では相当勢力のある金持だったが、  
(二二〇頁下段一〇)
- 「悪者らしい・勢力のある」は、形容詞相当の状態(ありさま)を意味していると見えよう。「相当」はそれらの語句を修飾していてその状態の程度が「相当」の程度であることを示している。

尚、「相当」は助詞「の」を介して体言を修飾する例を二例もつ。

- 彼はさう云ふ時代から知つてゐるだけに愛子が相当の年になつても妙に異性としては強く来なかつた。

(三〇頁下段二〇)

- 然し尾の道には耳鼻科専門の医者がゐなかつたので、広島か岡山まで行かなばならず、若し通ふ事にでもなれば相当の時間を取られるし、

(二〇一頁上段二一)

「相当の」は「年・時間」を修飾していてその時間量の多さがその基準(子供の頃・医院に通うに適当な時間)をかなり超えるものであることを意味している。

又、「相当に」として形容詞を修飾してその状態の程度が「相当」なる程度を意味する例を一例もつ。

- 此女が若かつた頃は相当に美しかつたかも知れないと、

(二四九頁上段一五)

## 二 「かなり」について 二十六例

「可成(り)」と表記されるもの十例、「かなり」と表記されるもの六例の十六例みられる。

① 形容詞を修飾する場合 三例

● それよりもお栄さんのために弁じて、かなり烈しく反対したのだ。(九六頁下段一九)

● 信行は此日可成り甚く酔ひ、一人でよく騒いでゐた。(二七一頁下段一八)

● 京都の暑さは可成り厳しかつた。(一八六頁下段九)

右例で「かなり」は「烈しく・甚く・厳しかつ」なる形容詞を修飾してそれらの状態の程度が「相当」度であることを意味している。

② 形容動詞を修飾する場合 六例

● そして彼は最近其会社の社長の娘と結婚する事になつてゐるが、それにも可成り不純な気があつた。(3)

(三一頁上段二三)

● 然し予期通りにしろ、矢張り彼は可成り不快な気がした。(三一頁下段一五)

● 肉づきのいい此大きな女が留桶を抱へて風呂の中で泳ぐ様子が謙作には可成不恰な形で想像された。

(六〇頁下段三)

● 可成り不快に、

● かなり自暴自棄に、

● 可成困難な、

右例の「かなり」は各々波線部分の形容動詞を修飾してそれらの状態の程度が「相当」度であることを

意味している。

次例も意味的にこの類例と数えうる。

● 然し謙作の耳へ入る程度の秘密ならかなり公然の秘密でもあるらしかつた。(一四頁上段二)

③ “動詞＋「てゐた・た」を修飾する場合 五例

● 彼は前日の寝不足からも可成り疲れて居たが、(二七頁下段一九)

● 謙作は可成り疲れて居た。(三八頁下段一六)

● かなり疲れてゐた。(七一頁下段三・二一八頁上段九)

四例いずれも「かなり疲れてゐた」で、「かなり」は「疲れてゐた」を修飾している。「疲れてゐた」は「疲れた状態であつた」の謂いである。「疲れた状態である」は形容詞・形容動詞の状態性と変らない。「かなり」はその状態の程度が「相当」度であることを意味している。

次の一例もこの類例と数えうる。

● 勧めた手前、既にかなり買占めの出来た間にそれが打明けにくくなつたに違ひない。(二二頁上段一)

「かなり」は「買占めの出来た」を修飾している。「買占めの出来た」はヒトの動作ではない。関と云うヒトのありようである。ありようつまりは状態の程度を「相当」度と「かなり」は量つている。先例と同類例と言える。

④ “動詞＋「た」を修飾する場合 一例

● 彼は不愛想に生返事をしたものの、心では可成り拘泥した。(一四頁下段二四)

右例で「可成り」は「拘泥した」を修飾している。「拘泥し」はヒトの心情作用を意味する。「拘泥し」には「拘泥した状態」が含まれる。「かなり」はその状態の程度が「相当」度において「拘泥し」なる作用が実現していることを意味している。その意味で、「かなり」は作用の実現の程度を「相当」度と量つている。

三 「かなり」について 六例

「かなり」の表記で二例、「可成(り)に」の表記で四例がみられる。

① 形容詞を修飾する場合 二例

● 彼が尾の道で自分の出生に就いて信行から手紙を貰った、其時の驚き、そして参り方は可成りに烈し<sup>く</sup>かつ<sup>た</sup>が、  
(二二〇頁下段一〇)

● お栄の事、それから自分の事、それを書くときかなり<sup>に</sup>長<sup>く</sup>な<sup>つ</sup>た。  
(二三九頁上段二六)

右例で「かなり」は、「烈し<sup>く</sup>かつ<sup>た</sup>・長<sup>く</sup>」と云う形容詞を修飾していて、その状態の程度が「相当」度であることを意味している。

② 形容動詞を修飾する場合 一例

● 此一寸した事が、二人の気持では可成りに変<sup>な</sup>ひ<sup>つ</sup>か<sup>か</sup>り<sup>方</sup>をした事<sup>が</sup>らに違<sup>ひ</sup>ないと思<sup>つ</sup>た。  
(四五頁下段九)

右例で「かなり」は「変<sup>な</sup>」と云う形容動詞を修飾していて、その状態の程度が「相当」度であることを意味している。

③ “動詞+「てゐた」”を修飾する場合 二例

● 其処を出た時には他の二人は可成りに酔つてゐた。

(一四頁上段一七)

● 船は可成に揺れてゐた。

(七〇頁上段一四)

右例で「かなりに」は、「酔つてゐた・揺れてゐた」を修飾している。「酔つてゐる・揺れてゐる」は「酔つた状態にある・揺れた状態にある」を意味している。「かなりに」は、その状態にある程度が「相当」度であることを意味している。①・②の場合とその意味のありようは変らない。

④ 「体言＋「の」＋「ある」を修飾する場合 一例

● 「要事」としてかなりに重みのある手紙だった。

右例で、「かなりに」は「重みのある」を修飾している。「重みのある」は手紙のありようつまりは状態で、「重要な」と云つた形容動詞の状態的意味と変らない。「かなりに」はその「重みのある」の状態の程度が「相当」度であることを意味している。

(6)

尚、「かなりに」の連体格と言える「かなりの」の例が二例みられる。

● 其間五六間が、かなりの勾配の廊下でつないである。

(八一頁下段一七)

● 河原はかなりの傾斜で森と森の間を裾野の方へ下つてゐる。

(二四五頁上段一)

「かなりの」は「勾配・傾斜」を修飾していて、「かなりの」は「勾配・傾斜」の「傾き」の程度が「相当」度であることを意味している。

四 「なかなか」について

「却々」と表記されるのが四十三例、「中々(中)」と表記されるものが二十六例、計六十九例みられる。

① 形容詞を修飾する場合 十三例

● 「あれは却々くわくわくいい芸者だよ、俺も半玉の時分に二三度会った事があるが、何処へ行つても恥かしくない芸者だ」  
(二〇頁上段五)

● 「さあ、来い」父は坐つた儘、両手を出して、かまへた。私は飛び起き様に、それへ向つて力一ぱい、ぶつかつて行つた。  
(九頁上段三)

「中々強いぞ」と父は軽くそれを突返しながら云つた。

● 「近頃は荒物趣味の方はどうだい？」

「勿論あるよ」と宮本は答へた。…(中略)…

「今度の旅でも大分買つて来た。其内朝鮮へも行かうと思ふんだ。朝鮮のは中々いいんだよ」などと云つた。  
(五八頁下段八)

右例で、「なかなか」は「いい・強い・いい」を修飾している。これらの文脈にあつて「なかなか」は修飾している形容詞の状態の程度が「相当」度であることを意味していると言える。次例も同類例である。

● 「中々いどい奴がある」

(六七頁下段三)

● 「中々いよく取つて来る」

(六七頁下段三二)

● 「却々いい声で」

(一四九頁上段八)

● 「中々いいのを」

(一七四頁上段一八)

● 「却々いい家」

(一八八頁上段一二)

• 「却々高い」 (二八八頁下段三)

• 「却々大きい」 (二八九頁下段一〇)

• 「却々えらい膿」 (二〇三頁下段二四)

• 「却々重いぜ」 (二四〇頁上段一八)

• 「却々暑かつた。」 (二四一頁上段一八)

以上、形容詞を修飾する「なかなか」は最後の一例を除いて会話文で用いられていることが注目される。又、修飾する形容詞の意味にも傾向がみられる。「いい」を修飾しても「悪い」を修飾する例をみないと云う。

## ② 形容動詞を修飾する場合 六例

• 「中々綺麗な女が居るネ」などと云った。 (一四頁上段八)

• 「あの登喜子と云ふ芸者は中々立派だね」と龍岡が云った。 (二四頁上段三)

• 「初めてお眼にかかった晩にも小稲ちゃん、仰有つたんですつてネ。それから昨晚もだつて。中々御執心なのネ。…」 (二七頁下段一二)

右例で、「なかなか」は「綺麗な・立派だ・御執心な」と云う形容動詞を修飾していてその状態の程度が「相当」度であることを意味している。次例も同類例である。

• 「却々困難な病気です」 (一九八頁下段一七)

• 「却々困難だつた。」 (一四二頁上段五)

最後の一例を除けば会話文で使用されている。次例も形容詞・形容動詞相当の状態の意味をもつ語句を「な



かなか」は修飾して、その状態の程度が「相当」度であることを意味していると言える。

●「其男なども話すと、却々しつかりした男でしたが、…」 (二五四頁上段二四)

次の二例も「なかなか」の意味は変わらないかと思う。

●「伯父さんは中々茶人なんだね」 (二七四頁上段二六)

●「貴方も中々お茶人なのね。…」 (二七四頁上段二三)

「なかなか」は「茶人な・お茶人な」を修飾している。「茶人な・お茶人な」は「茶人である・お茶人である」の謂いで、「なかなか」はその「茶人である・お茶人である」にありようとしての程度を見てその程度が「相当」度と量っていると見えよう。

③ 動詞＋「ている」を修飾する場合 一例

●「龍岡君は今何所だい？矢張り巴里かい？」末松が云った。

④ 動詞＋「難い・にくい」を修飾する場合 二例

手紙文に次の二例がみられる。

●「…といふ事は普通の女には中々出来難い事だ。」 (九〇頁上段一八)

●それはお前の意地としては、中々承知しにくい事とは思ふ。」 (九九頁上段六)

右例で、「なかなか」は「出来難い・承知しにくい」を修飾している。「出来難い・承知しにくい」は各々「事」のありようを示す。「なかなか」はその「ありよう」つまりは事の状態の程度が「相当」度であることを意味している。

●「さうだ。中々勉強してゐるらしいよ」

(二七九頁上段二三)

右例で、「なかなか」は「勉強してゐる」を修飾している。「勉強している」と云う動作の継続は一つの状態と言える。「なかなか」はその状態の程度が「相当」度であることを意味している。

以上、「なかなか」が状態の程度が相当度であると量る場合は、圧倒的に会話文で用いられたが、以下の諸類例では地の文での使用が普通のようなのである。

⑤ “する事が出来ない”を修飾する場合 三例

●頭も身体も**さ**は疲れてゐながら中々**眠る事**が**出来なかつた**。

(一〇頁上段七)

●「禅をやるといふのは最近にきめた事だが、今の生活に不満を感じ出したのは随分久しい事だ。所が、どうしても、それを直ぐよす気になれなかつた。いつかお前は直ぐよしたらいいだらうと、簡単にいつたが、それが俺には**却々出来なかつた**」

(一一〇頁下段二)

●夏が過ぎ、漸く秋に入つたが、依然謙作の心の状態はよくなかつた。それは心の状態といふより寧ろ不摂生から生理的に身体をこはして了つたのだ。彼はこんな事では仕方ないとよく思ひ／＼したが、だらしない悪習慣からは**却々起きかへる事**が**出来なかつた**。

(二三八頁上段三二)

右例で、「なかなか」は「眠る事が出来なかつた・(今の生活を)よす事が出来なかつた・(今の生活を)起きかへる」事が出来なかつたを修飾している。これらの「出来なかつた」は「眠る・(今の生活を)よす・(今の生活を)起きかへる」と云う作用・動作が実現しなかつたことを意味している。「なかなか」はその作用・動作の実現しない「容易さ」の程度が「相当」度であることを意味していると言える。実現することの容易さの程度と

言えば、その程度が低度であることを意味していることになる。

⑤と同類例と言えるものに⑥がある。

⑥ 動詞＋「れ(られ)ない(なかつた)」を修飾する場合 五例

●そして何日やうかかと考へると、それも却々決められない。(一二三頁上段三)

●…と承知しながら、それで却々彼には超越して考へられなかつた。(一二三頁上段八)

●惰性的に却々別れられなかつた。(四三頁下段三)

右例で、「なかなか」は「決められない・考へられなかつた・別れられなかつた」を修飾している。「決められない・考へられなかつた・別れられなかつた」は、「決める事が出来ない・考へる事が出来なかつた・別れる事が出来なかつた」と同意である。⑤と同類例と考へる。

次の二例も同じである。

●却々止められなかつた。(二一七頁上段七)

●却々出かけられなかつた。(二〇七頁上段二二)

⑦ 動詞＋「なかつた」を修飾する場合 二十三例

二十三例は「なかなか」の全用例六十九例の三分の一を占め、最もよく用いられる類型例である。

●そして又注意を集めて(目薬を)注さうとしたが、細い硝子管の薬が少なくなつて居るので、中々落ちなかつた。(四三頁上段一三)

●彼の放蕩は少しづつ烈しくなつて来た。(中略)―本統に夢中になれる女がゐさうに思ひながら、彼は

却々さう云ふ女に出会はなかつた。

(六二頁下段六)

• 自分は此事だけでも本郷の父へは心から感謝しなければ濟まないわけだと彼は考へた。——彼の感情は却々其処まで行かなかつたけれども。

(二二〇頁上段二六)

右例で、「なかなか」は「落ちつかなかつた・(さういふ女に)出会はなかつた・(其処まで)行かなかつた」を修飾している。「なかなか」は、さし当たつて「落ちつく・出会ふ・行く」ことの実現がかなり容易に行われることを示すが、それらが「ない」に係り結ばれるに及んで、それらの作用の実現の困難さの程度が「相当」度のものであることを意味している。

動詞が作用のものは他に四例みられる。

• 身体が却々回復しなかつた。

(二〇五頁下段三)

• 却々その気にならなかつた。

(二二八頁下段三二)

• 却々退かなかつた。

(一七頁下段一)

• さういふいい言葉が却々浮かばなかつた。

(二五二頁上段二六)

動詞がヒトの意志的動作である場合もことは同じである。

• 然し老人は中々その場を立去らうとはしなかつた。

(五頁上段一三)

• 龍岡は却々彼を離さうとはしなかつた。

(一四頁上段一一)

• 然し父は中中私のために負けては呉れなかつた。

(九頁上段二〇)

「なかなか」は、「立去らうとはしなかつた・離さうとしなかつた・負けては呉れなかつた」を修飾し、「立

去る・離す・負けてくれる」なる動作の実現の困難さの程度が「相当」度であることを意味している。この類例は十六例と多い。

● 却々昇つて来なかつた。

(二七頁下段二〇)

● 中々ゆづり合はなかつた。

(三六頁上段二一)

● 却々入つて行かなかつた。

(九五頁上段二〇)

● 中々承知されなかつた。

(九七頁下段五)

尚、「なかつた」ではなく、「ない・ず」と現在形のものもある。意味用法にvarietyはない。

● 却々氣に入つた名が浮かばず、

(一九五頁上段四)

● 女は却々来ない。

(二二八頁下段二〇)

● 夢といふ事を知つてゐるから、それが出来ると思ふのだが、足は却々自分のまほりを離れてくれない。

(二六五頁上段一八)

「なかなか」は、六十九例中形容詞・形容動詞やそれら相当の語句を修飾して、それらの状態の程度が相当度であることを意味するものは二十三例と全体の三分の一にすぎないことになる。残る三分の二分は「～難い・しにくい」「～する事が出来ない」「～られない・られなかつた」「～しなかつた・～しない」を修飾して、動作・作用の実現の困難さの程度が相当度であることを意味した。後者は地の文にも一般に用いられるに対して、前者は会話文に用いられることの多かつたのは、前者の意味が後者からの転用と考えられる。又、前者に於ける被修飾語に一つの傾向がみられるのも後者の「困難さ」の意味をひきずつてのものに思われる。

## 五 「割りに」 ついて

一―四の「相当・かなり・かなりに・なかなか」の示す程度より低いが、普通よりは少し上の程度を示すと  
思う。全部で三十五例みられる。

### ① 形容詞を修飾する場合 十八例

●翌日彼は尾の道へ帰つて来た。割りにいい天気で、往きに見られなかつた鞆の津の月を見るにはいい日だ  
つた。  
(八七頁下段九)

●彼は其女を嫌ひではなかつた。一寸美しい女だつたばかりでなく、何処か賢さうな所があり、一方食へな  
い感じもあつたが、彼に対しては割りに慎み深く、  
(二〇五頁下段二〇)

●暫くして二人は其所を出、連れ立つて東三本木の宿へ帰つた。そして謙作は前日からの事を割りに精しく、  
高井に話した。  
(二三四頁下段一一)

右例で、「割りに」は「いい・慎み深く・精しく」と云う形容詞を修飾していて、形容詞の示す状態の程度  
が「相当」度であることを意味している。相当度と云つても「相当・かなり・かなりに・なかなか」に比べる  
とそれらよりやや低いかに思う。次例も同類例である。

●割りに涼しい朝  
(二三九頁下段二六)

●割りに愛想よく  
(二三九頁下段三二)

●割りに若い人  
(二七三頁下段四)

●割りに注意深く  
(二〇一頁下段三三)

② 形容動詞を修飾する場合 十例

- 謙作は其日割りに静な気持でゐた。酒を飲むのもいやだった。 (五九頁上段一三)
- 不潔なじめくした路次から往来へ出る。道幅は狭かったが、店々には割りに大きな家が多く、一体に充  
実して、道行く人々も生々と活動的で、 (七五頁上段一一)

- 「尾の道ではきたなくしてた事でせうネ。男鰥に蛆が湧くといふから。蛆が湧かなかつたこと？」 (二〇四頁上段三二)

「割りに」は「静な・大きな・綺麗で(した)」と云う形容動詞を修飾していて、その状態の程度が「相当」度であることを意味している。次例も同類例である。

- 割りに大胆に (一三九頁下段一)
- 割りに質素な (一五三頁下段二四)
- 割りに気軽な (一六二頁下段一七)
- 割りに平気な (二〇六頁下段一一)
- 割りに上手な (二二一頁上段一八)
- 割りに適評で(あり) (一三九頁下段六)
- 割りに真身に (三〇頁下段二六)

③ その他の状態を示す語句を修飾する場合 三例

- それから彼は町を少し歩いた。或る町角に洋酒洋食品を売る軒の低い、然し割りに品物の充実した店があ

つた。

(八四頁下段二〇)

●客車の中は割りに空いてゐた。

(二〇一頁下段一八)

●「其内何か出来たら、お暇の時に見て頂きます」水谷は割りにハキくした調子で云つた。

(一七七頁上段六)

右例で、「割りに」は「充実した・空いてゐた・ハキくした」を修飾している。「充実した・空いてゐた・ハキくした」はいずれも形容詞・形容動詞相当の状態を意味すると言える。「割りに」はそれらの状態の程度が「相当」度であることを示している。

④作用・動作を示す語句を修飾する場合 二例

●そして「大丈夫です。不良少年といふ程でもなささうだし」と云ひながら、然し先の出やうでは割りにかつとする性質の自分に一升不安を感じた。

(五五頁下段一三)

右例で、「割りに」は「かつとする」を修飾している。「かつとする」は心情作用である。「割りに」は「かつとする」の「かつとした」状態の程度が「相当」度であることで「かつとする」作用がなされていることを意味している。

●彼は東京を出てから故意にお栄には余り便りをしなかつた。――(中略)――が、信行の方には割りに便りをした。

(七七頁下段二一)

右例で、「割りに」は「便り」に対して用いられていて、「便りをした」と云う動作を修飾している。「割りに」は「便りをした」頻度が「相当」度であることを意味している。



以上の二例は、現実の状態の程度を量る程度副詞ではない。

尚、以下のような用例もみられる。

● 間もなく高井は胃から来た割りに烈しい神経衰弱にかかり… (一三四頁上段三二)

● 水牛の角にしてはもつと肌理の細かい割りに軽い質のもので、 (一五四頁上段三二)

● 彼が愛してゐる割りに女の方は気楽な気持だったし、 (二二六頁上段三)

● 荒物の方はどれもこれも新しく安く、其割りに趣味があつて清潔だからいい。 (五八頁下段四)

● 勿論寝不足の故もあつたが、その割りには気分が冴え、気持は悪くなかつた。 (二二三頁上段六)

これらにあつて「割りに」は「割り」を修飾する事態から予想される程度に比べるとの意味となつていて、副語語尾とも言つていいものになつてゐる。

#### 六 「いい位に」について

唯一例であるが、次のような例がみられる。

● 淡い旅疲で、彼は気分も頭もいい位にぼやけて居た。 (七五頁下段一〇)

右例で、「いい位に」は「気分も頭も」ぼやけて居た」を修飾している。「ぼやけて居た」は「ぼやけた状態であつた」の謂いであり、気分と頭の状態を示している。「いい位に」はその状態の程度が「相当」度であることを意味している。

『暗夜行路』にみられる現実の状態の程度が相当度であることを示す語とその意味用法は以上のようなものである。

語の使用例の多さと云う点からすれば、「なかなか」が六十九例で最も多く、以下「割りに」の三十五例、「かなり」の十六例、「かなり」の六例、「相当」の四例、「相当に」の一例、「いい位に」の一例と続く。現実の状態の程度を相当度と量る程度副詞としての使用例となると、「わりに」が三十一例と最も多く、ついで「なかなか」の二十二例、「かなり」の十四例、「かなり」の八例「相当」の四例、「相当に」の一例、「いい位に」の一例となる。「なかなか」は現実の状態の程度を量る程度副詞以外の意味用法に用いられる例が多い。他の諸語はその大方或いは全てが云わゆる程度副詞として用いられている。尚、「なかなか」はそれが程度副詞として用いられる場合、殆んどが会話文においてである。そして先述の如き修飾語彙に一つの傾向をもみる。程度副詞としての「なかなか」は口語性が強く、容易でないありようを示す語彙を修飾すると云う純粋に程度副詞になりきれぬところがある。

#### (6) 低度であることを示すもの

低度であることを示すものについて前々稿『暗夜行路』にみられる程度副詞の語彙とその意味組織と各語の用法②―そのさまの程度を示すもの―『京都学園大学人間文化学会紀要『人間文化研究』第16号において挙げた語彙のうち「一寸・ちっと・いささか・幾分」の他「少し」の五語しかみられなかった。先ずは訂正したい。

その中で、最も多くの用例をもつ語は「一寸」で二一〇例、次いで「少し」の二三七例である。「一寸・ち

よっと」は現実の状態の程度を量る程度副詞としてよりもその他の意味用法に用いられる例を多くもつ。程度副詞として用いられやすく語の使用例の多いものから順にみてゆく。

一 「少し」について 一三七例

① 形容詞を修飾する場合 三十一例

● それでも其処が少し高くなつて居た。

(一九頁上段一一)

● 謙作は一寸まごつた。彼は少し赤い顔をしながら、

(二〇頁上段九)

● 彼は石本の好意には礼を云つた。然しこれからの自分には余り立入つて貰ひたくないと云ふ事も云つた。

石本は少し淋しい顔をして黙つて了つた。

(三二頁上段六)

右例で、「少し」は「高く・赤い・淋しい」を修飾してそれらの形容詞の示す状態の程度が低度であることを意味している。第一例が「まわりに比べると」と云う比較の程度として用いられているが、比較基準を明確に示している場合も二例ばかりみられる。

● 所が父の答へは予期より少し悪かつた。

(三二頁下段一八)

● 其処に二十分程待つと、普通より少し小さい汽車が着いた。

(八四頁下段二)

形容詞の示す状態の程度が低度であることを意味している諸例を少々挙げておく。

● 少し馬鹿々々しかつた

(二三頁下段一七)

● 少し五月蠅く

(三〇頁下段一四)

● 少しはればつたい眼

(四一頁上段一九)

• 少し青い顔 (四三頁下段一)

• 少し旧い家 (五六頁上段一一)

• 少し睡かつた (八二頁上段九)

• 少し蒸暑い日 (二〇一頁下段一八)

• 少し烈しい調子 (二一八頁上段一二)

② 形容動詞を修飾する場合 二十五例

• 「∴」。空模様が少し変になつてきた (一四頁下段一〇)

• 自分の前でこれ程にやつつけることが普段の彼の気質としては少し不自然に考へられた。

(一三頁下段一七)

• 「うん」謙作は自分でも少し不愛想だと思ふやうな返事をした。 (四五頁上段五)

右例で、「少し」は「変に・不自然に・不愛想だ」と云う形容動詞を修飾していて、その状態の程度が低度

であることを意味している。同類例を少々次に示す。

• 少し本気に (一二五頁下段一)

• 「少し窮屈だ」 (二五九頁上段一五)

• 少し不安に (二六二頁上段八)

• 少し億劫に (二六二頁下段四)

• 少し曖昧に (二六四頁下段一一)

③ “動詞＋「て・ている・ていた」を修飾する場合 九例

● 母の眼は少し釣上つて見えた。

(六頁下段一一)

● 今まで少しむつとしてゐたお加代は急に媚びるやうな眼をして

(五九頁下段四)

● 「あんまり通るのも変で少し遠慮してゐるが、見えたり見えなかつたりだ」

(二四一頁下段一五)

右例で、「少し」は「釣上つて・むつとしてゐた・遠慮してゐる」を修飾している。「釣上つて・むつとしてゐた・遠慮してゐる」は、「釣上つた状態で・むつとした状態でいた・遠慮した状態でいる」の謂いで、形容詞・形容動詞と同様の状態的意味を示している。「少し」は、それらの状態の程度が低度であることを意味している。

次例も同類例である。

● 少し傾いて

(二六三頁上段二)

● 少し離れて

(一〇二頁上段四)

● 少し変つてゐる

(二五〇頁下段三)

● 少し疲れてもいた

(二四七・下段一八)

④ “動詞＋「た」を修飾する場合 八例

● お加代も少し汗ばんだ顔を挙げた。

(五一頁上段七)

● そして市を少し出はづれた浜へ出掛けて行つた。

(七八頁下段六)

● 少し秋めいた静かない朝で、

(二五一頁上段一二)

右例で、「少し」は「汗ばんだ・出はづれた・秋めいた」を修飾している。「汗ばんだ・出はづれた・秋めいた」は「汗ばんでいる・出はづれている・秋めいている」と云える意味で、形容詞・形容動詞相当の状態的意味として用いられている。「少し」はその状態の程度が低度であることを意味している。

次の三例も同様の例と言えよう。

- 「君に少し話したい事があるんだが、…」  
(二〇頁下段五)
- 「今手紙が来て、自家の方の事でも少し話したい事があるし」  
(二三八頁下段二一)
- 宮本は少し気をひくやうに云った。  
(五六頁上段二)
- ⑤「体言＋「あり」」を修飾する場合 五例  
●後には段々お前の運命をさういふ風に考へるのは少し邪気のある小説趣味から来た考へ方だと思ふやうになつた。  
(九一頁上段七)
- 右例で、「少し」は「邪気のある」を修飾している。「邪気のある」は「大変・とても・非常に邪気のある」と云う言い方ができることからヒトの質的な状態を示す。「少し」はその状態の程度が低度であることを意味している。但し、次の四例では「少し」は量の少なさを意味している。
  - 少し人家のある浜辺には……  
(八一頁下段六)
  - そして現在彼は同じ鶉の枳に大柄な、豊頬な、然し眼尻に小皺の少しある、何となく気を沈ませてゐる彼女を見た。  
(二六八頁上段一三)
  - 少し借りがあつたらしく  
(二八八頁下段二二)

- 少し用があるから (二一三頁下段二四)
- 他に少量を意味するものに次のような例がある。
- 「中に少し水が溜つてゐるやうですから……」 (二〇五頁上段一〇)
- 少し酒でも飲むと大きい声をするので (二六三頁上段二六)
- 浮世絵を少し買つて行きたいと思ふんだが (二二頁下段三三)
- (枕の空気を) 又少し出した (二〇二頁上段三三)
- 少し飲んだら (二四一頁下段八)
- 少し寄附しないか (一八九頁下段六)
- 少し読んで見たが (二三九頁下段一〇)
- ハーンのを少し持つて来れば (二三九頁下段一七)
- 以上をモノの量とすると時間量・距離量の少なさを示す例もある。
- 結局其辺の茶屋で少し休んで行く事にした。 (一四頁下段一八)
- 少し話してゐた。 (一四九頁下段五)
- 少し昼寝をして置かないと (二五四頁上段三三)
- そして馬乗りの儘少し後さつた。 (六頁下段一三)
- 永代稿を少し行つた所で (六一頁上段一〇)
- そして少し行くと (一三六頁上段一四)

量の少なさを示すものは三十三例みられる。

⑥時間・方向を示す語を修飾する場合 四例

●その少し前に私は其日のおやつを貰つてゐたのだつた。

(七頁上段一二)

●午少し前、彼は老夫婦と重い旅靴を下げた松川に送られて停車場へ行つた。

(二〇一頁下段九)

●謙作は直ぐ群集から少し後ろに離れて直子と、それに附添つて水谷が立つてゐるのを見つけた。

(二二二頁上段一〇)

●「棧敷は何の辺?」石本も角力へはよく行く方だつた。「正面」「ふむ。石本さんの棧敷の近くかな?」

(中略)「ええあの少し上……」

(二一四頁下段一一)

右例で、「少し」は「前に・前・後ろに・上」を修飾して、「前に・前」の時間量の程度が低度であることを、「後ろに・上」の距離量の程度が低度であることを意味している。

「少し」が云わる程度副詞として用いられているのは以上の六類型で、一三七例中九〇例を数える。量の少なさを示す例は三十三例と程度を量る例のほぼ三分の一にとどまる。

以上の他に、「少し」は次の二類例をみる。

⑦状態を伴つた作用を示す動詞や動詞語句を修飾する場合 十例

●緒方は少し醒めかけるとは飲んだ。

(三七頁下段五)

●仕方がない、俺は其儘其場を切り上げたが、後で亢奮が少し静まると、初めて俺には父上の氣持がハッキリ映つて来た。

(九七頁上段四)



・謙作の方も少しドギマギした。

(三三頁上段八)

右例で、「少し」は「醒めかける・(凡奮が)静まる・ドギマギした」を修飾している。「醒めかける・静まる・ドギマギした」は「醒めかけた状態になる・静まった状態になる・ドギマギした状態になる」との意味である。「少し」はこれらの状態の程度が低度であるありようで各々の作用が実現していることを意味している。次例も同類例である。

・「昨晩は少し荒れたので」

(七二頁上段五)

・少し苛々した調子

(二六頁上段二六)

・少し腹が空いて来た。

(九五頁上段八)

・少し疲れて来た。

(一三三頁下段一三)

・「少し困るな」

(一七二頁下段一一)

⑧状態を含んだ動作を示す動詞や動詞語句を修飾する場合 四例

・細君は肩を少し揺すりながら声なく笑った。

(一〇二頁下段一一)

・「どうでもなれ」さう思ひながら彼は二段づつ跨いでブリッヂを馳せ上つたが、それを降りる時は流石に少し用心した。

(一三〇頁下段二)

・「余つ程疑つてるの?」「キリく痛むんだ。頭がまるで変になつちやつて、眠れないんだ」「私が少し揉んで上げませうか」「いいえ、沢山」

(二二二頁上段一七)

右の例で、「少し」は「揺すりながら・用心した・揉んであげませう」を修飾している。「揺する・用心する

・揉む」は本来ヒトの行う動作である。「揺する・用心する・揉む」はその動作に「揺すりよう・用心のしよう・揉みよう」と云う状態を伴なう。「少し」はそれらの「(し)しょう(様)」と云う状態の程度が低度であることにおいてそれらの動作が実現していることを意味している。

残る次の一例も同様に思える。

・彼はもう少し自分の生活をどうにかしなければいけないと思つた。

(四六頁上段五)

「(もう)少しどうにかする」のだが、「どうにか」なる「ありよう」が低度の程度において「する」のである。ただし、「どうにか」は「大変・非常に」では量られない。「かなり・相当」しかなじまない。「どうにか」に、高度・極度の程度は「どうにか」と云う語句の意味になじまないからであらう。

## 二「多少」について 二十九例

現実の状態の程度を示すもの二十例、作用の表現の程度を示すもの九例を数える。表記は全て「多少」である。

### ①形容詞を修飾する場合 一例

・多少まぎらはしい気もするのであった。

(二四八頁上段一六)

右例で、「多少」は形容詞「まぎらはしい」を修飾していて、その状態の程度が低度であることを意味している。

形容詞を修飾しているのはこの一例だけである。

### ②形容動詞を修飾する場合 六例

● 龍岡は謙作の方を向いて多少神經的に笑った。(二二頁下段二)

● 「又なんて、ひどいよ、お前さん」お加代は多少下品な調子でいつて、お牧の肩を突いた。(五九頁上段一九)

● 今度も亦、多少病的にさうなつた事が、彼を疲らし、彼の神經を弱らし切つて居たのだ。(二六九頁上段一八)

右例で、「多少」は「神經的に・下品な・病的に」と云う形容動詞を修飾してその状態の程度が低度であることを意味している。

次例も同類例である。

● 多少可哀想でもあつた。(二七一頁下段一一)

● 多少心配でもあつた。(二七一頁下段二)

● 多少変態なのではないかしらと思つたが、(二五七頁上段二六)

③ “動詞又は動詞十「て・ている・た・ていた」を修飾する場合 六例

● そこへ又異ふ女中が初めての謙作に多少遠慮する心地を見せながら……(四一頁上段一七)

● 尤も彼は普段から綺麗と云ふ言葉と立派と云ふ言葉を多少區別して考へて居た。(二四頁上段六)

● 彼は自身が余りに云ひ過ぎた事を多少悔いてもある風だつた。(一四頁上段一三)

● 初めての緒方が居るので多少改まつつた気持もあつた。(三七頁上段一五)

● 何の不安もなく、睡い時、睡に落ちて行く感じにも多少似てゐた。(二六二頁下段三二)

右例で、「多少」は「遠慮する・別して・悔いてもある・改まった・似てゐた」を修飾している。「遠慮する」は「遠慮した状態である」、「別して」は「区別したありようで」、「悔いてもある」は「悔いた状態である」、「改まった」は「改まった状態である」、「似てゐた」は「似ている状態にあつた」の意味と云え、各々形容詞・形容動詞相当の状態の意味と言へる。「多少」はそれらの状態の程度を低度と意味している。

④ 動詞＋「れたやうな」を修飾する場合 一例

● 多少裏切られたやうな心地で彼は一切前日の話は持ち出さなかつた。(二二九頁上段三)

右例で、「多少」は「裏切られたやうな」を修飾している。「裏切られたやうな」は「裏切られたそのようなさまである」と云え、形容詞・形容動詞相当の状態性を示している。「多少」はその状態の程度が低度であることを意味している。

⑤ 動詞＋「ない」を修飾する場合 三例

● 彼は多少落ちつかない気持で、柱に背を寄せかけて、(二五頁上段六)

● 絵葉書で勝手に想像してゐた向きとは全く反対側にそれがあつたので多少彼は物足らなかつたが、(八一頁下段二四)

● 多少そんな気持がしなくてもなかつた。(二二六頁下段三二)

右の最初の二例で、「多少」は「落ちつかない・物足りなかつた」を修飾している。「落ちつかない・物足りない」は動詞を「ない」が打ち消しているのであるが、その全体が形容詞相当の心情のありようを示している。「多少」はその「ありよう(状態)」の程度が低度であることを意味している。

第三例は「そんな気がする」を打ち消しての「そんな気がしない」を更に打ち消し「そんな気がしないでもない」として「そんな気がしている」の意味となつている。それは又前二例と同様の状態性意味と言える。

⑥ 「体言＋「だった」」を修飾する場合 一例

● 前から多少知合ひだったお才へ手紙でその事をいつて寄越した。 (二〇八頁上段一八)

右例で、「多少」は「知合ひだった」を修飾している。「知合ひである」と云うのは二人の人間関係(ありよう)を示す。「多少」はそのありよう(状態)の程度が低度であることを意味している。

⑦ 「多少の」として体言を修飾する場合 三例

● 何方かと云へば多少の興味もあつた。 (一四頁下段二)

● 多少の迷惑があるとしても (二〇九頁上段一〇)

● 仕事の上では他人の多少の迷惑は構つてゐられない場合もあるものですから (二〇九頁上段一四)

右例で、「多少の」は「興味・迷惑」を修飾している。「興味・迷惑」は「興味があること・迷惑であること」の意味として各々状態性を有する。「多少の」はその状態の程度が低度であることを意味していると言える。

「多少」がモノゴトの状態の程度が低度であることを量る場合は以上の七類型が全てである。

「多少」は更に次の意味用法を有する。

⑧ 作用を示す動詞を修飾する場合 八例

● 多少苛々もして、其女を泣かす事などが書いてあつた。 (二二頁上段八)

• それだけでも多少お米にはいい感じがした。

(六五頁上段二三)

• 彼は多少船量を感じた。

(七〇頁上段一九)

右例で、「多少」は「苛々もして・遠慮する・いい感じがした・船量を感じた」を修飾している。「苛々もして」は「苛々」に、「いい感じがした」は「いい感じ」に、「船量を感じた」は「船量」に各々状態性をもつ。「多少」はそれらの状態の程度が低度であることにおいて修飾する各々の作用が実現していることを意味している。

次例も同類例である。

• 多少(病状が)進むかも知れませんが、

(一九九頁上段一八)

• 多少気がひけながら

(二二一頁上段二二)

• 多少其頃の気持を呼び起こすであらうか？

(二一七頁上段二〇)

但し、最後の例は、「呼び起こす其頃の気持」が少しの量と「量の少なさ」を示しているかに思える。

### 三 「幾らか」について 三十八例

#### ① 形容詞を修飾する場合 七例

前々稿で述べたように比較的低度を示す場合のものが六例ある。六例中形容詞を修飾するものが四例で、残る三例は次のようである。

• 春めいた長閑な日だった。――(中略)――彼も幾らか軽い心持で、

(七九頁下段九)

• 「君のもああ云ふ種類の気持なのか？」と云った。「……」謙作は一寸考へてから、「幾らか近い気持だ」

と答へた。

(二二六頁上段一七)

● これから六里の道を一緒に行くといふ事が既に彼等を幾らか親しくしてゐる感じだった。

右例で、「幾らか」は形容詞「軽い・近い・親しく」を修飾していて、それらの状態の程度が低度であることを意味している。

② 形容動詞を修飾する場合 四例

前々稿<sup>(3)</sup>で述べたように比較的程度を示すものが一例ある。残る三例は次のようである。

● 幾らか具体的な計画を話した。

(六五頁下段六)

● 謙作は余りに社交馴れない自分が幾らか不安でもあった。

(一五三頁下段四)

● 然しその頃、末松は祇園の三流芸者との新しい関係で幾らか有頂天になつて居る時で、

(一八二頁上段一五)

右例で、「幾らか」は「具体的な・不安で・有頂天に」と言う形容動詞を修飾していてその状態の程度が低度であることを意味している。

③ “動詞又は動詞十「て・た・ていた」を修飾する場合 八例

● 其所まで云つて了つて、今は幾らか後悔して居た。

(一四七頁上段八)

● そして、その卑猥な意味は要だけには幾らか分つてゐたが、直子には何の事か全く分らなかつた。

(二二〇頁上段八)

● 謙作の家は一年以上借りる約束で、幾らか家賃が割引であつた。

(一五三頁上段二二)

右例で、「幾らか」は「後悔して居た・分つてゐた・割引してあつた」を各々修飾している。「後悔して居た・分つてゐた」はヒトの心情のありようであり、「割引してあつた」は家賃のありようである。「幾らか」はその「ありよう」の程度が低度であることを意味している。

前々稿ではふれなかったが、比較的 low 度を示す意味にも用いられている。

同一物の二つの場合の比較

・「第一尾道行とは動機が幾らか異ふんですがね。」

(二三五頁上段一九)

右例は主人公が尾道行の場合の動機のありようと今回の大山行の動機のありようを比較してその相異を述べている。「幾らか」は「異ふ」を修飾している。「異ふ」は動詞であるが意味していることは状態である。「幾らか」はその状態の程度が低度であることを意味している。

同一物の時間的前後に於ける場合の比較

・謙作の眼には此前とは登喜子が又幾らか変つて見えた。

(三七頁上段一四)

謙作の眼に見える登喜子のありさまの此前と今回と云う時間的前後に於ける場合を比較してのものである。「幾らか」は「変つて」を修飾している。「変つて」は「変つていて」の意味で状態を示している。「幾らか」はその状態の程度が低度であることを意味している。次例も同類例である。

・然し間もなく銭湯へ行き、さつぱりした気持になつて帰つて来ると、苛々するのも幾らか直つて居た。

(一六二頁下段一五)

・謙作は幾らか和らいだ気持で続けた。

(二三四頁下段一九)



④ 「体言＋「ある」」を修飾する場合 二例

● 「幾らか昔の経験があるから考がどうしても自然そつちへ入つて行くらしい。」 (二四〇頁下段一七)

右例で、「幾らか」は「昔の経験がある」を修飾している。「昔の経験がある」は「昔の経験」を量としてのみ扱えていない。「昔の経験とそれより得たものを身につけている」と云ったむしろ質的狀態を意味している。「幾らか」はその質的狀態の程度が低度であることを意味している。

今一例は、同一のもの二つの場合の比較で、前々稿では挙げていない。

● 自分では他の堅い商売よりは幾らか自信もあるらしいのだが、… (二四〇頁上段一〇)

右例で、「自信もある」は「自分」における状態である。「幾らか」はその状態の程度が低度であることを意味している。

⑤ 「体言＋「に」」を修飾する場合 一例

● 然し午頃から幾らか小降りになった。 (二五頁上段一〇)

右例で、「幾らか」は「体言＋「に」」と言える。「小降りに」を修飾している。「小降りに」は雨の降るありさまである。「幾らか」はそのありさまつまりは状態の程度が低度であることを意味している。

⑥ 「幾らかの」と云う形で体言を修飾する場合 三例

● かう云ふ話は兎もすると、聴手に幾らかの反感を起こさせるものだが、 (四〇頁上段一七)

● 前日の汽車の疲れと、前夜の睡眠不足―(中略)―為めに其日は軽い頭痛と、幾らかのはき気もあり、

(二六八頁下段六)

●彼は総てで幾らかの自制が出来て来ると、……

(二二九頁上段六)

右例で、「幾らかの」は「反感・はき気・自制」を修飾している。「反感」は「反」に、「はき気」は「はき(吐き出しそうな)」に、「自制」は「制」各々なりの状態の意味を含む。「幾らかの」はその状態の程度を低度と量ることで体言全体を修飾している。

尚、次の一例もここに入れてよいかに思う。

●日の暮れ、京都を出て北へへ、幾らか登りの道を三里行くと、

(一九〇頁上段一三)

「幾らか」が状態の程度を量る程度副詞として用いられているのは、以上の六類例においてである。

⑦状態を含む動作・作用を修飾する場合 十三例

十三例中十二例が動作々用の主体の意志でなされるものでない作用を修飾する例である。

●風は幾らか凪ぎ、船は紀州の海岸に添うて進んでゐた。

(七一頁下段二二)

●出がけ、直子の支度が遅れ、彼は門の前で待ちながら幾らか苛立つのを感じた。

(二二九頁下段三)

●が、まはりの者には絶えざる刺激の泣声が聴こえなくなつただけでも幾らか助かつた。

(二二〇頁下段三三)

右例で、「幾らか」は「凪ぎ・苛立つ・助かつた」を修飾している。「凪ぎ・苛立つ・助かつた」は「凪いだ状態になる。苛立つた状態になる・助かつた状態になる」とほぼ同意と言える。「幾らか」はそれらの状態の程が低度であることにおいてそれらの作用の実現がなされたことを意味している。

次例も同類例である。

● 幾らか肩ぬげが出来た。

(一八六頁下段一三)

● 幾らか変化したのは

(二〇七頁上段一七)

● 気分は幾らか変った。

(一一七頁下段三)

● 幾らか救はれた気持

(二一九頁下段一)

● 幾らか釣られた形だったので

(二五六頁上段八)

尚、一例だけ動作を示す語句を修飾している。

● そしてそれ程に悪辣な女だといふ所を幾らか強調した話し振りなので、

(一一五頁下段四)

「幾らか」が修飾する「強調した」は、「強」に状態的意味があることである。

「幾らか」は「少し」と異なり、少なくとも『暗夜行路』の使用例においては、量を示すことはない。

#### 四 「ちょっと」について 二二〇例

「ちょっと」は一貫して「一寸」と表記されている。

##### ① 形容詞を修飾している場合 二十九例

● 三人を見ると、取りつき端がないやうに一寸赤い顔をした。

(二五頁下段六)

● 其時お栄が喜びながら、一寸淋しい顔をした事を彼は憶ひ出して、

(三三頁上段四)

● そして其看護婦を謙作も覚えてゐる。一寸美しい女だった。

(六〇頁下段二四)

右例で、「一寸」は「赤い・淋しい・美しい」と云う形容詞を修飾していて、それらの状態の程度が低度であることを意味している。

次例も同類例である。

- 「一寸羨しいな」 (六五頁下段二)
- 「一寸可笑しくなった」 (八二頁下段八)
- 「一寸耳が悪かつたが」 (一〇四頁上段四)
- 「一寸欲しい気」 (二二八頁上段九)
- 「一寸六ヶしいでせう」 (一九九頁上段四)

尚、次のような例(左の二例のみもここに数えている)。

- 若し早くなると、田舎は穫入れ時で忙しく、一寸出にくいとの事だった。 (一八八頁上段一)
- 「生憎俺の所に今全で金がないんだ。自家から貰つてもいいが、その事を今一寸云ひたくないからね。」 (一八八頁下段一六)

## ② 形容動詞を修飾する場合 四十四例

- 彼は一寸快活な気分になって、「さあ、お仕舞ひだ」と云つて、 (一九頁上段六)
- 「もう解つたよ。何遍繰返したつて同じ事だ」阪口も一寸不快な顔をした。 (二二頁上段三三)
- 謙作は一寸不思議な気がした (六七頁上段一〇)

右例で、「一寸」は「快活な・不快な・不思議な」と云う形容動詞を修飾していて、それらの状態の程度が低度であることを意味している。

次例も同類例である。

- 一寸こすさうな眼つき (二七頁下段二)
  - 「一寸いやだらう」 (五六頁上段五)
  - 一寸悲慘な気 (七七頁下段一)
  - 一寸氣の毒な気 (八二頁下段二)
  - 一寸困難に (九七頁下段一八)
  - 一寸変な気 (一一九頁下段八)
  - 一寸不安な気 (一二八頁下段八)
  - 一寸意外な顔 (一四六頁下段五)
- 尚、次の例もこの類例に数えている。
- 一寸活動小屋のやうなケバくしい部屋に (四〇頁下段一)
  - お鈴は一寸愉快さうな顔をした。 (四三頁上段三)
  - 彼は一寸夢から覚めたやうに感じた。 (五五頁下段二)
  - 一寸具合悪さうだな (一七二頁上段二〇)
  - 一寸行つて見たいやうな気 (二六五頁上段一五・一七)
  - 一寸怒つたやうな眼付き (二七〇頁上段三)
  - 一寸濁つたやうな丸味のある声 (二五一頁上段一四)
- 次例もここに数えておく。

●前からゐる老妓とは反対に大きな立派な女だった。一寸小楯の型で総てがずつと豊かで美しかった。

(四八頁上段三二)

③ “動詞＋「た・ていた」を修飾する場合 三例

●外から見た所では一寸氣の利いた家だった。(一一七頁上段九)

●直子は一寸羞んだ微笑を浮かべながら近寄つて来た。(二二二頁上段三二)

●謙作は今度は故意に、それに応じて、同じやうに首肯いて見せたが、それが自分ながら一寸調子のはづれて居た。(五〇頁下段七)

右例で、「一寸」は「氣の利いた・羞んだ・(調子が)はづれて居た」を修飾している。「氣の利いた」は、「家」の状態を示しており、「羞んだ」は「微笑」のありようを示し、「(調子)がはづれて居た」は「謙作の首肯く有様」を示している。「一寸」はそれらの状態の程度が低度であることを意味している。

以上が云わゆる現実の状態の程度が低度であることを「一寸」が意味する全てである。

③の類例が「少し」・「多少」・「幾らか」と比べて少なすぎるのが注目される。この程度副詞の意味からして次のような意味用法の展開がみられる。

④ “動詞＋「ない」を修飾する場合 八例

●「其爺さんはいやな奴だが野口といふのは人のいい一寸勧誘なんか向かない方の奴なんで、…」

(六七頁下段八)

●彼には一寸見当がつかなかった。

(五七頁下段一三)

●寒さに向つて一人々々仲間が死んで行くのを見てゐる時の気持を考へると、一寸かなはない気がした。

(一五四頁下段六)

右例で、「一寸」は「(勧誘なんか)向かない・(見当が)つかない・かなはない」を修飾しているが、これらの場合「一寸」は結果として「ししない」とする「しなさ」の程度が極度と言へる意味となりえている。「一寸」は「向く・つく・かなふ」と云う作用が「一寸」(低度)においてなされているとし、それがさらに「ない」に係ることにおいて「一寸(でも)向く・つく・かなふ」が打ち消されると「まったく」とも言へる「向かなさ・つかなさ・かなはなさ」の程度が極度との意味に転じる。「向く・つく・かなふ」との作用の実現の程度が零度を意味することにもなる。

次例も同類例である。

●一寸手がつかかなかつたから、

(一一七頁下段四)

●一寸はつきりしなかつた。

(一四七頁上段九)

●一寸堪らない気がした。

(二六一頁上段一七)

●「一寸憶ひ出せないが、」

(二四六頁上段九)

⑤量の少なさを示すもの 四十二例

1 時間量の少なさを示すもの 三十三例

量を示す用例の中でこの場合のものが圧倒的に多い。

●彼は一寸拘泥したが、拘泥するだけ変だとも思ひ返して、

(二〇頁上段一〇)

• 「こちらは私の昔の岡惚れにそりやよく似ていらつしやるわ」と云ひ返した。

謙作は一寸まごついて矢が次げなかつた。

(一六頁上段一七)

• 時々湯気を吐き一寸間を措いて、ぼーつといやに底力のある汽笛を響かしながら、静かに入つて来た。

(七四頁上段一〇)

右例で、「一寸」は「拘泥した・まごついて・間を措いて」を修飾していて、それらの作用の行なわれた時間量の少なさを意味している。

次例も同類例である。

• 「一寸抵抗したが、

(一九頁上段九)

• 「一寸気を沈ませた。

(二三頁上段一一)

• 「一寸表情が変つた。

(四七頁下段一八)

• 「一寸上を見て、

(二九頁上段七)

• 「一寸、待つて下さいませしよ」

(四五頁上段三)

• 「一寸立止まつて

(六七頁上段四)

• 「一寸、遅れますがな」

(二一三頁下段一四)

尚、「の」を介して体言を修飾する例が一例ある。

• 乳首を含ませると一寸の間泣き止むが

(一九五頁上段一〇)

「間」と云う時間の「少なさ」を意味している。



2 モノの量の少なさを示すもの

● 其頃から、昼間は向ひ島の山と山との間に一寸頭を見せてある百貫島の燈台が光り出す。

(七六頁上段一二)

● それから又小さいチューブを出し、指先に一寸油をつけて、

(一〇二頁下段四)

● 「一寸背中の方を出して下さい」

(一九七頁下段五)

右例で、「一寸」は「頭を見せてる・油をつけて・背中の方を出して下さい」を修飾していて、「頭を見せてる百貫島の燈台・指先きにつける油・背中」の量の少なさを意味している。

尚、長さ(距離)の量の少なさを示している例が一例みられる。

(九五頁上段一〇)

● そして暗い海添ひ道を一寸後もどりして蠟船料理へ行つた。

⑥ 状態を含みもつ動作・作用を示す語句を修飾する場合 二十四例

● 一寸失望したが、起して貰ふ程でもないと思つて電話を断つた。

(一八頁上段一七)

● 君は登喜子が好きかい？ 謙作は思ひ切つて訊いて見た。

「さう訊かれると困るが、君はどうだい」と龍岡は反問した。

謙作は一寸困つた。

(二四頁上段一八)

● 「ふん」お由は一寸肩をすばめて笑つたが、

(二四九頁下段八)

● 「(電燈が)延びるんぢやないこと」と直子が一寸背伸びをしてそれを下げようとした。(二七二頁下段一三)

右例で、「一寸」は「失望した・困つた」と言う作用と「肩をすばめて・背伸びをして」と言う動作を各々

修飾している。「失望した・困った」は「失望した状態になった・困った状態になった」とも言いうる意味であり、「肩をすぼめて・背延びをして」は「肩をすぼめた状態をして・背延びをした状態をして」とも言いうる意味である。各々その作用・動作の中に状態を含みもつ。「一寸」はそれらの状態の程度が低度において各々の作用・動作が実現していることを意味している。

次例も同類例である。

- 一方で一寸不愉快を感じた。(四六頁下段二三)
- 一寸不安を感じた。(五五頁下段二三)
- 一寸迷ったが、(八〇頁下段二三)
- 一寸苛々して(一一〇頁上段二六)
- 一寸がっかりした。(二五五頁上段一八)
- 一寸顔をしかめ、(二五九頁上段一五)
- 一寸心配したが、(二七〇頁上段一一)

心情作用を示す用例が殆んどと言える。

⑦動作がたいしたありようでなく行われることを示すもの 四十七例

「一寸」にしかみられない意味用法である。

• 「小稲と云ふ人は居るかい」物馴れた調子で阪口が訊いた。

「さあ、もう晩うムんすから、有ればようムいますか。お馴染なんですか」

「いいえ」阪口は済まして答へた。

人のよささうな女中はそれを真に受けていいものか、どうかを迷ふらしかった。そして、

「一寸見て参りましせう」と降りて行つた。

(二五頁上段一八)

茶屋で休むことにした一行三人が座敷に通されたところで一行の一人龍岡が茶道具を持って入つて来た女中に芸者を頼んでいるところである。

「一寸」は「見て参る」と云う動作を修飾している。そしてその「見て参る」動作の実現のされ方が隅々に至るまでくまなくと云つたものでなく大して手間暇かけず云わば軽くと云つたなされ方であることを「一寸」は意味している。

・夕方彼が未だ眠つて居る所に兄の信行が訪ねて来た。玄関へ出て行くと大きい赤皮のポオトフォリオを抱へた、会社の帰途らしい信行が立つて居た。

「寝てたのか？」

「ああ」

「何処か飯を食ひに出ないか」

「ああ。然し一寸上がらない？」

右例で、「一寸」は「上がらない」の「上がる」を修飾している。「上がる」は「上がっていく」の意味としてである。「上がっていく」のに「手間暇かかることなく」と云つたされ方であることを「一寸」は意味している。

● 餉台のまはりには座布団が三つ敷いてあった。謙作が其一つに坐つた時、

「皆さんは？」と登喜子が訊いた。

「龍岡とは昨晚来たよ。」

「ええ、それは昨晚一寸寄つて伺つたわ。それからあの方……阪口さんは？」 (二六頁上段二四)

右例で、「一寸」は「寄つて」を修飾している。「一寸」はその「寄り」方を述べている。「余り時間をとらずこれと云つてすることもなく」と云つた「寄り」方であることを「一寸」は意味していると言えよう。

次例も同類例である。

● 「一寸来て頂戴」 (二〇二頁上段六)

● 「一寸電話をかけて見よう」 (二八頁上段一三)

● 「一寸催促して呉れ」 (四七頁下段三)

● 「一寸頭を下げた。」 (一八頁上段一三)

● 「一寸顔をあげて點頭いた。」 (一一八頁上段二三)

● 「一寸見せてやり給へ。」 (五九頁下段三)

● 「一寸五条まで買物に行つて来る。」 (二一九頁上段一三)

いずれの用例においても「わずかの時間」は一貫して認められる意味であり、それにとどまらず「僅かの時間」がおのずからする「殆んど動作以外に何と云つてすることもなく」と言つた意味が併せあるかに思う。

この動作のなされ方を示す意味は次の意味用法(連用↓連体)をもつ。

⑧ 「一寸した」として体言を修飾する場合 十三例

● 「何か商売でもしてられるのかい？」

「何か一寸した事ことをしてるんだらう。その従妹と共同でやつてるんだ」 (二七九頁下段二三)

● 二階の静かな部屋に通された。彼は起つて、障子を開けて見た。未だ戸が閉めてなく、内からさす電燈の明りが前の忍返しを照らした。其彼方が一寸した往来わらいで直ぐ海だった。 (七三頁下段七)

● 謙作は又庭を病室の方へ歩いて行つた。障子をメ切つた中からは時々医者達の低い話声と、一寸した物音ものごゑがするだけで、 (二〇三頁下段四)

右例で、「一寸した」は「事・往来・物音」を修飾している。「一寸した」はそれらの体言のありようが「大したものではない」と云つたありようであることを意味している。「僅かの時間」は「低度のありさま」に変つている。動詞から名詞への修飾の変化が自らすることである。

以下、次のような同類例をもつ。

● 一寸した不謹慎ふしんべん (二二七頁上段二一)

● 一寸した不気嫌ふきげん (二二五頁下段一四)

● 一寸した感情かんじょう (二二七頁下段二四)

● 一寸した旅行程度りょこうていど (二三四頁下段二四)

● 一寸した平地へいぢ (二三八頁下段二四)

● 一寸した小さい座敷ざしき (二六〇頁下段七)

●「一寸した印象」

(二六八頁上段一一)

●「一寸した物」

(一九〇頁下段六)

五 「ちつと」「やや」「いささか」について 各々 二・一・一例

●「全く、ちつと怪しいわネ」と笑つて居る。

(三八頁上段三)

右例で、「ちつと」は形容詞「怪しい」を修飾していて、その状態の程度が低度であることを意味している。

「ちつと」は「ちつと」と表記され、今一例モノの少しの一部分(少量)を示す例がみられる。

●「ちつと、お前さんの資本を此方へお廻しなさい」

(二六一頁下段一)

「やや」は「稍」と記され「やや」とルビが付られている。

(一九〇頁下段四)

●焚火の町を出抜けると、稍広い場所に出た。

(一九〇頁下段四)

右例で、「稍」は「広い」を修飾していて、「広い」の程度が低度であることを意味している。

「やや」の使用例はこの一例のみである。

●謙作は叡山に次ぐ天台の霊場といふやうに聞いてゐただけに此話にはいささか落胆した。

(二四四頁下段一五)

右例で、「いささか」は「落胆した」を修飾している。「落胆した」は「がっかりした状態になつた」の意味であり、「いささか」はその状態の程度が低度において「落胆した」なる作用が実現していることを意味している。

状態の程度を低度と量る用例はみられない。

モノゴトの現実の程度が低度であることを意味する語は以上のようにして、少し・多少・幾らか・一寸・ちつと・ややの六語である。<sup>(3)</sup> 程度副詞(状態の程度を低度と量る)としての使用例は「少し・ちよつと」が共に八十例前後と多く、「幾らか」の二十余例がこれに次ぐ。「多少」は形容詞・形容動詞共に修飾する語の限定があるかに思える。用例の少なさからそれ以上はさし控えたい。「幾らか」は比較的程度に用いられやすい。「ちつと」「やや」は一例をみるにとどまる。「少し」「一寸」は少量をも意味する。共に三、四十例をみる。「一寸」は時間量の少なさを示すに片寄る。その他の語にはこの用法をみない。状態の意味を含みもつ主に作用を示す語句を修飾してその状態の程度が低度において実現することを示す用例は「少し・多少・幾らか・ちよつと」に共通してみられる。「いささか」の一例はこの意味としてのものである。格助詞「の」を介して体言を修飾する用法は「多少・幾らか」にみられ、「少し・ちよつと」にない。「ちよつと」は「ちよつとした」として体言を修飾する。「ちよつと」にみられる「動作がたいしたありようでなくなされる」ことを示す意味は他に全くみられない。

量を意味する語が状態の程度をも意味することは、程度の高度を意味する語においてはみられなかったことである。低度を示す語の高度を示す語と比べての少なさと共に高度重視、低度軽視とも言えるヒトの心を見る。

『暗夜行路』にみられる程度副詞の語彙とその意味組織と各語の用法は前々々稿(1)に始まり、本稿(4)にて一

応了りとする。

注

- (1) 『暗夜行路』にみられる程度副詞の語彙とその意味組織と各語の用法(2) 京都学園大学人間文化学会紀要第16号・第17号
- (2) 『日本国語大辞典』第一版は、「相当」の項で二『副』ものごとの程度が普通よりはなほだしい様子を表わす語とする。
- (3) 『暗夜行路』にみられる程度副詞の語彙とその意味組織と各語の用法(1)―比較的程度のもの― 京都学園大学人間文化学会紀要第14号